

蠅のはなし

二百年許り前に、京都に飾屋九兵衛といふ商人が居た。店は島原道の少し南の、寺町通といふ町にあつた。下女に——若狭の國生れの——玉といふが居た。

玉は九兵衛夫婦に深切に待遇されて居て、誠に二人を好いて居るやうに見えて居た。が、玉は他の女の子のやうに綺麗な著物を著ようとはしないで、休暇を貰ふと、美しい著物を數數貰つて居ながら、いつも仕事著を著て出るのであつた。五年許り九兵衛に奉公してからのこと、或る日九兵衛は、どうして身綺麗にしようかと骨を折らぬのかと彼女に訊ねた。

玉はその問ひにこもつて居る非難に顔を赧らめて、恭しくかう答へた。

『私の雙親が死にました時は、私はまだ小さな子供でありました。ところが他に子供がありませんでしたから、二人の爲めに法要を營むことが、私の義務になりました。其時分にはさうする程のお金を拵へることが出来ませんでした。然しそれに入用な金が儲けられたなら、早速二人の位牌を、常樂寺といふお寺へ置いて貰ひ、また法要を營んで貰はうと決心しました。それでその決心を果たすために、お金と著物とを節約しようと力めました。——自分の身のことを構はぬと、お氣付きになる程でありますから、餘り節儉し過ぎて居るのかも知れません。然し、お話し申し

上げました目的の爲めに、銀百匁許りの貯蓄がもう出来ましたから、此後はあなた様のお前へ身綺麗にして出るやうに致しませう。これまでの懈怠と失禮とを、どうか御免し下さいますやうお願ひ致します』

九兵衛はこの率直な自白に感心したので、その女に深切な言葉をかけて、その後、どんな著物を著ようと、自分の勝手だと思つてよいからと受合ひ、且つまた、その親孝行を賞めてやつた。

二人の此會話があつてから間もなく、下女の玉は、その雙親の位牌を常樂寺に置いて貰ひ、また相當な法要を營んで貰ふことが出来た。貯へた金のうち、斯くして七十匁費やした。そして残り三十匁を、主人の妻に預つて置いて下さいと頼んだ。

ところが、翌冬の初めに玉は急に病氣になつた。そして暫時、煩つた擧句、元祿十五年（一七〇二年）正月の十一日に死んだ。九兵衛と妻とはその死を大いに悲しんだ。

さて、それから十日許り後、非常に大きな蠅が一匹その家へ入つて来て、九兵衛の頭の廻りを飛び始めた。どんな蠅も、大寒中には大抵は出て来るものではないし、大きい蠅は暖かい季節でなければ滅多に目に當らぬものだから、九兵衛はこれに驚いた。その蠅があまりしつこく九兵衛を惱ますので、わざわざ捉へてそれを戸外へ放り出した、——其間少しもその蠅を痛めぬやうにして。それは九兵衛は佛教の篤信者であつたからである。直ぐ蠅は戻つて来た。そしてまた捉へ

られて又投げ出された。が、又入つて来た。九兵衛の妻はこれを奇異な事に思つた。『玉ぢやないか知ら』と言つた。「死んだ者——殊に餓鬼の境涯へ入る者——は時時、蟲の姿になつて戻つて来るから」九兵衛は笑つて答へた。『目印をつけたら分るだらう』そこで、その蠅を捉へて、極く少し許り翅の兩端を缺で切つて——さうして、家から餘程離れた處へ持つて行つて放した。

翌日歸つて来た。それが歸つて来たことに、何等靈的な意義があるかどうか、九兵衛はなほ疑つて居た。又もそれを捉へて、その翅と軀とに紅を塗り、前よりもずつと家から遠い處へ持つて行つて放した。ところが二日經つと、全身眞紅の儘で戻つて来た。そこで九兵衛は疑はなくなつた。

『玉だと思ふ』と彼は言つた『何か欲しいものがあるのだ。——何が欲しいのだらう』

その妻が答へて言ふに、

『私は玉の貯蓄の三十匁をまだ有つて居ます。自分の魂の爲めに供養を營むやうに、その金をお寺へ納めて貰ひたいのでせう。玉はいつも後生を氣づかつて居ましたから』

さう話して居るうちに、その蠅が、そのとまつて居た障子から下へ落ちた。九兵衛が拾ひ上げて見たら、死んで居つた。

其處で夫婦は早速、お寺へ行つて、その娘の金を寺僧に納めようと決心した。二人はその蠅の屍骸を小箱に入れて、それも携へて行つた。

お寺の主僧自空上人は、その蠅の話の話を聞かれると、九兵衛夫妻は正しい取計ひをしたと明言された。それから自空上人は、玉の魂の爲めに施餓鬼を營まれ、蠅の遺骸に對して、妙典八卷を誦された。そして蠅の遺骸の入つて居る箱は、お寺の境内へ埋められて、適當な銘の書いてある卒塔婆が一基、その上へ建てられた。

(大谷正信譯)

Story of a Fly. (Kotō.)